釧路市立北中学校「学校だより」

北　魂

令和６年（2024年）３月18日発行　VOL 51

やりたいことに挑戦できる学校

釧路市立北中学校長　冨　田　直　樹

15日（金）に第74回卒業証書授与式が行われました。コロナ禍における様々な制限を解除し、久しぶりに保護者の皆さんをはじめ、多くの関係各位の参列の下、３学年生徒の卒業の門出を祝うことができました。一人一人に卒業証書を渡しましたが、受け取るときの生徒たちの表情から、上級学校において自らの夢の実現に向かい努力していく覚悟を凛々しさとともに感じました。本当に立派な生徒たちでした。

さて、文部科学省は昨年の12月25日に、2023年度の公立学校教員採用試験倍率の調査結果を公表しました。前年度比0.3ポイント減の3.4倍で過去最低、倍率が低下するのは６年連続です。校種別では、小学校が2.3倍で最も低くなっています。ちなみに中学校は4.3倍で前年度比0.4ポイント減でした。採用倍率の低下は、受検者数の減少が最大の要因ですが、採用者数は高止まりしていて、今後ますます学校における教員の育成が重要視されてくると思います。

では、どうしたら学校において教員が育っていくのでしょうか。管理職が教職について伝達したり、先輩教員が授業を見せるなど、たくさんの方法がありますが、根本に視点を当てると、学校が「やりたいことに挑戦できる場」になっていることが大切だと考えます。そして、管理職等が教員のやりたいことへの挑戦をサポートしていくことが大事であると思います。そうなるためには何が必要なのか、今年度の反省も含めて考えてみます。

まずは、「学校の心理的安全性を高める」ことだと思います。ハーバード大学の組織行動学者であるエイミー・エドモンドソン教授は、心理的安全性について「職場のような特定の状況下で、対人関係のリスクをとっても安全だということが、メンバー間で共有されている状態」と解説しています。「やりたいことへの挑戦」をサポートするためには、まず教師一人一人が「こうしたい」という想いを表明し、失敗を恐れず挑戦できる、心理的安全性の高い組織風土をつくることが必要だと思います。次に、「取組の過程を見守り、結果を引き受ける」ことだと思います。「やりたいことに挑戦してください。でも責任は負いません」では教師は安心して挑戦することはできないと思います。教師の取組を見守り、適宜フィードバックしながら、結果については管理職が責任をもつ、という姿勢が心理的安全性を高める上では重要だと思います。最後に、「経験と学びを共有する」ことだと思います。教師のやりたいことへの挑戦が、例え失敗に終わったとしても、その経験から学びが見付かり、全教職員で共有します。失敗はあくまでも過程の一部であり、失敗を含めた当該教師の経験が学びの機会になるという雰囲気を醸成することが重要だと思います。

「教師がやりたいことに挑戦できる学校」の「教師」を「生徒」に変えることも可能だと思います。次代の生徒たちのためにも実現する策を練りたいですね。